

『日本の劇』戯曲賞 2025



「日本の劇」戯曲賞 2025（主催/日本劇団協議会）の最終選考会が 2025 年 10 月 6 日、日本劇団協議会会議室にて行われ、次のとおり決定しました。

最終選考委員の演出家は、板垣恭一、小林七緒、五戸真理枝、内藤裕敬、宮田慶子の 5 氏（敬称略、五十音順）です。

最優秀賞

『残像を掬って』 三上玲

今年度の応募総数は 66 作品。一次選考を経て最終候補作品として選出されたのは、次の 7 作品でした。

【最終候補作品】（受付番号順）

内藤裕志	『笑う筆～東洲斎写楽生滅物語～』
サワザワマミ	『あて馬ならし』
山脇立嗣	『はじまりの詩 ^{うた} 』
茉莉花	『不揃い家族。』
三上玲	『残像を掬って』
國吉咲貴	『町の塩分』
よしだあきひろ	『幕 ^{ベキ} 』

※「幕」のルビは事務局にて補記。

【最終選考委員選評】



板垣恭一

戯曲賞なので、物語として面白い以外に判断基準を持つようにしています。僕個人の基準のひとつ「発見があるか」という角度から今回の選評を書いてみようと思います。

『はじまりの詩^{うた}』を僕は大賞に推しました。日本で最初の手話サークル誕生を描いた本作。知識としての発見に「手話の作られ方/聾学校の問題点/昭和38年の時代背景」などがあり、人間への発見に「他人の苦労を我が事と気づかせるロジックの作り方」がありました。技術的な発見に「ほぼ3人の話し合いだけで作品を成立させられている点」があり、何より印象的だったのは作者の姿勢に対する発見で「現代において真面目な主題を直球で描く」ことの重要性に気付かされたことでした。

次に推したのは『霧^{べき}』です。発見があったのは設定の部分。「演劇が減びてしまった近未来の人間が、その土地に宿る過去の記憶から演劇を作る」という物語は新鮮でした。そして共感という発見に「人間のキャラクターは実生活の役割に左右されている＝つまり人格はデータに過ぎないかもしれない」ということ、作品全体に漂う「はかなくも軽薄な世界観」が現代そのものに感じられること、などがありました。僕は本作が大賞でもOKでした。

『残像を掬って』での発見は「人間の悪意のありか」もしくは「人間の欲望の不思議」でした。発見できなかったのは、時系列を行き来させること、事件内容についての謎を引っ張りすぎる意味や必要性でした。「なるほど」より「なぜ」が多く、匂わせ過ぎだと僕は判断しました。

『笑う筆～東洲斎写楽生滅物語～』は作者が登場人物を大好きなようだという発見があり、とても好感を持ちました。キャラクター設定やストーリー展開はよく出来ていて面白いのですが、そのどれもがどこかで見たものに感じ、戯曲賞として見た場合には残念なポイントとなりました。『あて馬ならし』はシェイクスピア劇の脇役が主役になれるかというオーディションを受ける設定に発見があり期待しました。ただオーディション内容がどれも同じような展開だったのがもったいなく。個々のキャラクターを大切にするあまり、全体を俯瞰する視点が弱くなってしまったのかもしれませんが。『町の塩分』は、塩が禁止された町という寓意あふれる設定に発見がありましたが、その他の設定の詰めの甘さが気になりました。大事な塩を机におきっぱなしだったり、外出から帰ったときに訪問者の靴に気がつかなかったり。細かい部分を大切にするともっと面白くなるはずと思いました。『不揃い家族。』は老人を主軸にした物語ですが、キャラ、設定、ストーリー、それぞれに意外性や新規性という発見がありませんでした。型にはめることから一歩進んでみるのもいいかもしれません。

テーマ性から目をそむけない真面目で骨太な作品と、正体が掴みづらくなっている現代の空気感をとらえた作品。贅沢を言えば両方を兼ね備えた作品。そんな作品が生まれることを僕は期待しています。

小林七緒

身近なことや社会問題をテーマにかなりストレートに書いているが、深いところまでは触れられていない作品が多いという印象でした。その中で、作家の「これを書きたい」という切実な思いが感じられるものほど、人物が鮮明で台詞が生きており、引き込まれる戯曲になっていました。

『笑う筆～東洲斎写楽生滅物語～』 写楽の正体を名もなき男に設定し、それを弥次喜多に語らせるアイデアが良い。写楽になった男・氣助の物語の方をもっと見たかった。実演に際しては、役者絵の出し方が難しいところ。



『あて馬ならし』 シェイクスピア作品の中の「あて馬」たちに、自分が主役になる物語を作らせる、というのは面白かった。いろいろな作品から引用しているのに、3つともパターンが似てしまったのが残念。S（シェイクスピアを演じる）の役割も少しわかりにくい。

『はじまりの詩^{うた}』 3人の学生の書き分けが丁寧で、会話に自然に乗れる。「我慢しろ、諦めろ」と畳みかけるシーンに、作家の熱を感じた。ただラストの方、憤りが溢れすぎてしまったか、説明ぽくなってしまったのが勿体なかった。

『不揃い家族。』 お年寄りたちが抱えるいろいろな問題を会話の中に入れていますが、話している人たちの区別がつきづらく、役割があいまい。駄目な若者の正体が実は…というのも、内容が少し強引に感じられた。面白く読めたが、何を言いたい戯曲なのかがいまひとつ伝わってこなかった。

『残像を掬って』 最初、若者たちのふわっとした会話に乗り切れなかったのだが、水槽やカーテンなどのト書きの意味に気が付いてから、面白さ怖さが見えてきた。ヤングケアラー、学校内の関係、居場所探しなどが、説明的にならず上手く会話になっている。トミタの闇が現代。

『町の塩分』 同調圧力や宗教の話を、「塩の使用禁止」という町内の小さな話にしたのは上手いと感じた。白い粉などの扱いや、醤油はいいのかなど、詰め切れていないところも目立つ。水炊きの登場に、ここからどう発展するかワクワクしたが、周りがあっさり引いて終わってしまい残念だった。

『幕^{べき}』 近未来で、2020年頃のある場所の記憶を演じる、という設定。企画者3人がグダグダなのがよい。2020年頃の男女二人が、呼び名の変化に対応して関係性がリアルになっていくのが面白かった。ラスト近く、世界が滅びたように見えるところが（ト書きだが）クライマックスだが、そのあとが詰め切れていないように感じた。



五戸真理枝

一次審査を担当した作品は、モチーフや会話にエンターテインメント性の高い作品が多く、戦争ものの多かった昨年とはガラリと印象が変わりました。集まった作品が映し出しているのはどんな世なのか、拝読しながら考えさせられました。最終審査候補作に推したのは、作者なりの視点を感じた作品です。

『笑う筆〜東洲斎写楽生生滅物語〜』は、弥次さん喜多さんが狂言まわしと主要以外の全ての役を演じるという設定、筋立て、セリフも上手く、エンターテインメント作品を書く力のある方だと感じました。今すぐ和物の新作書き下ろしを依頼したいくらいです。

『あて馬^{うた}ならし』は、バッドエンドに運命付けられているキャラクター達にチャンスを与えてみる遊び心と筆の勢いに惹かれました。各エピソードをもうほんの少し丁寧に運ぶと、より光るのではないかと思います。

『はじまりの詩^{うた}』中盤の野々村のセリフにのみこまれ、劇世界に入り込み、心打たれました。テーマに対する探究心と努力が編み上げた戯曲だと感じ、作者の真剣さに脱帽しました。個人的大賞作品です。

『不揃い家族。』近藤健が不良の人物かと思ったらいい若者だったところが爽快でしたが、ハッピーエンドに持っていこうとしないでこの物語を書くと、悲しい物語になってしまいうのでしょうか。途中から考えさせられました。

『残像を掬って』若者達の会話のリアルさに惹かれました。トミタという人物がしっかり描き抜かれていると思います。水槽やカーテンという、具体的なものによる象徴的な表現が、突然映像表現が入ってくるように感じ、演劇としてそこをどう捉えるか悩みました。

『町の塩分』痛烈な人間批評に作者のエネルギーを感じます。ちゃぶ台の下に二人隠れようとしたり、幽霊の夫がいたり、馬鹿馬鹿しさに溢れた舞台になるのか、それとも結構リアルになるのか、いいバランスが取れる演技はどんな塩梅なのか、独特な世界観だからこそ演出のセンスが求められそうだと感じます。

『幕^{へき}』未来の演劇を見せる導入に強く引き込まれたのですが、前説の言葉の終盤、創作途中を公開しているという設定を理解するのが難しかったです。初見では混乱しました。

「幕」という言葉を調べてみると、「ある数または式を繰り返し何回か掛け合わせたもの。累乗。」とのことですが、これは演劇の創作過程の比喻でしょうか。鍵はタイトルにあったのかと思いました。登場人物の名前が詳しくなると会話が詳しくなるというカラクリが痛快です。

内藤裕敬

『笑う筆～東洲斎写楽生滅物語～』 写楽の正体にピン！と来たアイデアで疾走感のあるパワフルな物語に仕上がった。困む登場人物達も、もうひと踏み込みして欲しいところだが面白い。ただ、当の写楽がアイデア倒れになってしまっている。物語に深みを。

『あて馬ならし』 相当にシェイクスピアを読んでおられ、大好きなんですね、この作者。様々な名作の中から恋のソデにされる連中に焦点を当てて構成され面白い。しかし、それぞれの逸話の構成と構造に変化が少ない。単調になっている。全体の構成に到達できなかったのが残念。

『はじまりの詩^{うた}』 力作！何故、この物語を書かねばならなかったのか？それに対する作家の熱意を感じる。

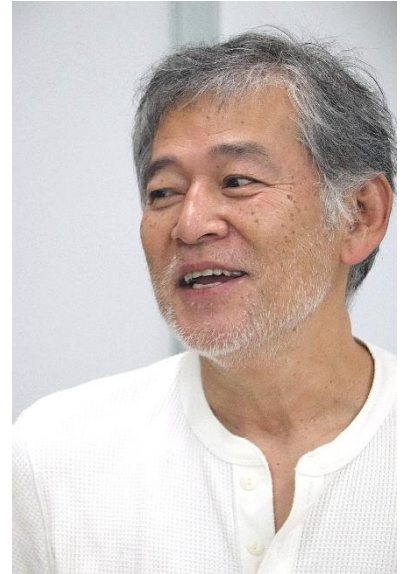
ろう者と社会、手話の必要、その黎明期に夜間学校でぶつかる三人の夜間学生を中心に時代と生活を織り混ぜて物語は進んで行く。こりゃ久し振りの大賞だな！そう思いながら読み進んだが、この物語は、もっと広い世間のリアルなメタファーとならねばと思えた。でなければ、告発が中心になってしまうように思えるのだ。もっとグサリッ！とこちらに突き刺さって欲しいな。登場人物が明確な役割の緻密な設計の中に居る気がする。その存在よりも主張が走って行く。その息苦しさが物語を硬直させてしまうと演劇としては損だ。

『不揃い家族。』 だいたい家族の多くは不揃いなものだが、その不揃いさを存分に遊ばれた作品でした。作者ご自身が日常的に感じる不揃いを小マメにメモしてヒネったりしながら散りばめている。エピソードは面白いのだが戯曲となると行間に立ち上がる奥行きが、もっと欲しい。様々を会話に落とし込みすぎたかな。

『町の塩分』 これ私、大好き。笑える。御町内の力関係で塩を使わないという根拠の無い掟に振り回されるメタファーと人々をうまく描いている。台詞も良い。が、ぶっ壊れない。ぶっ壊れそうで、ぶっ壊れない。最後に「水炊き」この鍋の登場に大いに期待したのだが……。爆発力が欲しいな。

『幕^{べき}』 二〇四五年問題がある。AI 実用化である。その頃には現在の演劇が現在の価値観で存在しているのだろうか？この辺りを演算したら累乗の構造で遊んでみたら、こんな物語になるのかなあ？そんなことを考えて読みました。賞に届きそうなんだけれども、作者が目指した構造は、効果的に発表できたんだろうか？混乱のまま書き終わっちゃったかな？混乱を面白く！

『残像を掬って』 未熟です。もっと経験が必要。しかし、妙な怪しい感覚がある。私達の思い過ごしだろうか？いやいや、私みたいなオッサンには触れることのできない「今」の乾いたねちっこさがある。そんな気にさせる。その可能性を信じて大賞。





宮田慶子

最終選考に残った7作品は、それぞれの題材へのこだわりが伝わってくる、個性的な作品が並びました。題材にのめり込みながらも持ち続ける「どう展開させていくのか」という構成力と、「舞台をどう着地させるか」という客観性が求められたように思います。

『笑う筆～東洲斎写楽生滅物語～』は、相当量の文献や資料にあたった上で書き進めていることが伝わる力作でした。諸説ある「写楽の正体は誰か」という歴史上の謎に挑戦した意欲は認めるのですが、天衣無縫な氣介に振り回される蔦屋や周りの人たちの心の葛藤など、人間のドラマにもっと転化できるとよかったと思います。架空の人物の弥次喜多が狂言回しをするアイデアは面白いです。

『あて馬ならし』は、作者のシェイクスピアへの愛情、造詣の深さ、知識量が伝わってくるのですが、それらが人間の葛藤や状況のドラマとして立ち上がると良かったと思います。照明やSEなどの書き込みは、進行指示ではなく“ト書き”として表現すると、状況や情景がより作れると思いました。

『はじまりの詩』は、手話を巡る歴史や考察を、限られた登場人物のリアルな言葉によって展開したことに敬服します。方言の使い方も意味を持っています。語られる事柄は知られていない事実もあり、衝撃的であり、それを広く知らせる意義は理解します。ただ、メッセージに向かって行く構造が直線的なので、演劇的な広がりアイデアがもう少し欲しかった印象です。

『不揃い家族。』は、現代社会の断片をとらえているのですが、高齢者たちの思いや境遇を、セリフで語るのではなく、状況や関係性で作れると良かったと思います。展開のスピード感はあるのですが、それぞれの内面や心の声が見えて来にくい居心地の悪さがありました。

『残像を掬って』は、時系列の細かい行き来に戸惑いましたが、ゆっくりと「事件」の糸を解いていく場面の積み重ねに次第に引き込まれました。高校生たちの部活の部屋の密室の空気感と、彼らのいる世界観とが重なります。言葉が足りない今の高校生らしい台詞が、「言えないこと」「言ってはいけないこと」を切実に感じさせてくれます。

『町の塩分』は「塩」をタブー扱いにするという仕掛けで、町を支配する因習や同調圧力を浮かび上がらせるアイデアは面白かったです。息子二人の唐突な出会い方や、引きこもりと三浪の設定が深まらずに便宜的になっているのが勿体無いと思いました。父親の遺影が生身で絡むことが、もう少し有効になりたかったです。

『幕』は、さまざまな手法で「演劇を遊ぶ」姿勢が素晴らしいです。カップルの人称が変化しながら、セリフがリアルになっていく確信的な展開は見事です。二重構造のベースとなる「ひとびと」が、「二人」に比べると存在感を持ちにくく、視点が取れないまま“爆発”に至ったように思います。「場所に記録された記憶」とノスタルジックな装置は魅力的です。